

## ムシル「グリージャ」について

本 岡 五 男

## I

ローベルト・ムシル (Robert Musil 1880~1942) がカフカ、ブロッホと共に現代ドイツ文学の最も注目すべき作家の一人として高く評価されるようになったのは、ごく近年のことである。ナチスは、魂の自由を信じ、感情の表白を重んじ、反抗と破壊の姿勢の顕著な表現主義作家たちに迫害の手を伸ばし、いわゆるドイツ文学の空白時代を現出させたが、表現主義的傾向の認められるムシルも1938年には、スイスへの亡命を余儀なくされた。しかし、こう言う外部事情のほかに、ムシルの作品そのものもなかなか正当な評価を受けるようにならなかったようである。軍人になるべく士官学校に入りながらそこで習った砲術により強く興味を抱き、任官する直前に志望を変えて、エンジニアになろうと工科大学に入り、そこを卒業すると哲学と実験心理学への関心からベルリン大学に赴く、と言うふうに転々と志望を変え、1906年、「生徒テルレスの惑乱 (Die Verwirrungen des Zöglings Törleß)」を発表して漸く作家として身を立てる決心をしたのであったが、この作品に対する世評はムシルの意図する所から遠くはなれた所でなされたものであった。ムシルは、この作品が声価を得たのは誤解からであり、「人々は私の心理学やリアリズムを賞めた。又、多くの人々は、告白の書ではないにせよ、体験の書であると思っていた。」と不満をもらしている。現在では知らぬ人のない「特性のない男 (Der Mann ohne Eigenschaften)」の第一巻を発表した1930年にも、ムシルの作家としての評価はなお定まらず、貧困の生活を続けていたと言う。Rowohlt 書店

の「三人の女 (Drei Frauen)」に書いている Adolf Frisé のあとがきによれば、「生きているドイツの作家の中で、確実に死後の名声を得ると思われる作家は他にはおりません。」と言うトマス・マンのムシル予想の言葉すら、知っている人は殆んどいなかったと言うことである。ムシル60才の誕生日に寄せられた挨拶もごくわずかであったとか。ムシル死後7年たった1949年でもなお、ロンドン・タイムズは、「今世紀前半の最も重要なドイツ小説家ローベルト・ムシルは、この時代の最も知られない作家の一人である。」と書いたと言う。要するに、ムシルが20世紀の最大の作家の一人と目されるようになったのは、死後10年を経た1952年に、未完の遺作「特性のない男」が完全な形で出版されて以後のことである。この1625ページに及ぶ大作には、未完とは言え、ムシルの一切が投入されていると言われている。ムシルの足跡を「特性のない男」まで辿って行かならば、いわゆるドイツ文学の空白時代を些か埋め、且つ又、現代ドイツ文学の動向を把握するよすがともなるであろう。

本稿は「三人の女」に収められている「グリージャ (Grigia)」を、「特性のない男」の研究に向う第一階梯としようとしているのである。ごく小さい一短篇を以てムシルと言う巨像にふれることは無暴のそしりをまぬがれないであろうが、月の影が小さな水たまりにも宿るように、又、大河のある小さな部分も大河の一部と言えるように、ムシルの片鱗は認め得るであろう。

「グリージャ」は、それぞれ別個に発表された「ポルトガルの女 (Die Portugiesin)」、「トンカ (Tonka)」と合わせて1924年に Rowohlt 書店から刊行された「三人の女」の中の一編である。

## II

20世紀の人間生活は複雑である。一個人の生活もおびただしい局面によって多様に織りなされており、逆に、人生を織りなしている一局面を取り出せば、その一局面に対して多様な角度からの解釈が可能である。従来の、僅かな局面に限って、一つの角度から観察された作品は、もはや20世紀後半の人間生活全般を如実に表現しているとは思われず、知的にも情的にも現代人にとって魅力のないものとなりつつある。古典的な発展小説における社会は、個人に対する客観的な対立物であって、社会そのものの総体を描かれていることは稀である。自我と世界の対立が、刺戟と刺戟を受ける者との対立に変わった現在、人生全般の表現としての多層性と多様な解釈が現代文学に要請されるのである。ムシルもまたこの要請にこたえようとする。しかし、ムシルの描く世界は、文明や因襲や既成道徳などでおおわれた現実ではなく、又、因果関係の上に立つ現実でもない。

「グリーンジャ」においては、ムシルは、この世界の形成そのものに多大の比重をかけている。全体で26ページのこの作品の前半16ページには、話の筋の展開に一見何の関係もないように思われる挿話がさまざまに組み入れてあり、グリーンジャが登場するのは、その表題にも拘らず16ページを過ぎてからである。KaiserとWilkinsがその解説書「Robert Musil」で指摘しているように、「三人の女」は、それぞれ、「グリーンジャ」、「ポルトガルの女」、「トンカ」と言うふうに女をその表題としているが、表題の女は実は主人公の導き手、ないしは、更に言えばトンカなどは男が変容向上するための道具でしかない。従って、「グリーンジャ」の構成に関するホーマンスタールの批評は、半ば当てっており、半ば当てていないとも言える。ムシルは「自伝のためのスケッチ (Skizzen zu einer Autobiographie)」にこんな意味のことを書いている。即ち、ホーマンスタールに「グリーンジャ」を激賞してもらったが、物語の構成にもっと注意を払うべきであったと非難され

た。これに対し、わざと構成の問題に深く立ち入ろうとはしなかったと答え、又、その理由も述べた記憶がある。今日考えてみると、この非難をもっともだとし、自分自身にも同じ非難を向けたことに気づいた。記憶をたどってみると、急いだのとどうでもよいと言う気持が原因であったことは確かだ、と。表面的には確かにホーマンスタールの非難の通りである。しかし、ムシルの意図する所は別にあったと言わねばならないのである。

「文学の使命は、存在するものを描くことにあるのではなくて、存在すべきもの、ないしは、存在する可能性のあるものを、存在すべきものの各一部分として描くことにある。」とムシルは言う。そして、この「存在する可能性のあるもの」を描くに際し、ムシルは、Strelkaの指摘する「動機づけ (Motivation)」と「口数の少い子供のふける空想 (die versenkte Phantasie des stillen Kindes)」を交錯させて行く。「グリーンジャ」においては、組み入れられているさまざまな挿話が、因果関係の認めがたいままにつながって行く。物語の冒頭に出て来てそれ以後直接的には物語の進行に何の関係も持っていない病気の息子は、主人公ホモと愛妻とを別居させる契機になっていることは明らかであるにしても、妻子と共に息子の湯治旅行に同行するのをおっくうがった、保守的で現状維持を望んでいる平凡な小市民ホモが、旅行中に知り合った程度の友人ホフフィンゴット (Hoffingott) の勧誘で、どうして、投機的な金鉱採掘に、しかも多額の出資をして参加するようになったのか。しかも、妻子が出発した2日後に、ホフフィンゴットからのわずか一行の電報によってである。ホモの心境一変がどうして起ったのか。ムシルは一行の説明も加えず、いや、一言の暗示すら示さずにホモを早速旅立たせる。人間は合理的、理性的に納得出来ない何かによって動かされていると言うのか、運命と言うべきか、偶然と言うべきか、奇蹟あるいは神の摂理と言うべきか、我々はそう言う個所に出会う度に判断に迷う。Strelkaはムシルのこのような手法を、意志と関係のない「動機づけ」と呼び、錯綜した出来事や人生の全体を出来る限り効果的に把握しようとしたのだと言う。

ムシルの素質、「口数の少い子供のふける空想」は、探険隊に加わって鉱山へ向うホモの道程に非現実的な様相をおびさせる。読者はホモと共に次第に現実から非現実的な世界へ導き入れられて行き、いつしかムシルの世界へ、即ち、文明とか因襲とかの無い、何の規範もない世界に入りこまされている。ホモが——なぜそこに寄宿するようになったのかわからないが——寄宿するホフフィンゴットの知人の家の家具がすでに風変わりである。じゆうたんを見ていると自分自身がぐるぐる巻きのつとなつて宙に浮いたり沈んだりするような錯覚をおぼえる。Pなる小都市の通りの有様、枯葉と若葉の入りまじったぶどう畑や森。そしてその土の下には水晶や紫水晶がひそんでいて、何か期待感を人の心にはぐくむ。金鉱のある山峡の村は前時代的な杭上家の集り (Pfahldorf)、そしてそこに住んでいるのは素朴で野生的な人たち。ここでは過去の個人的な事柄は問題にされず、問題にされるのは現在の姿であり、現在の人格である。食いつめた暮しをしているこの村では、たいていの夫は可能性を求めて、可能性の国、新天地アメリカへ出稼ぎに行く。女たちの服装も古めかしく、彼らはかなり奔放な生活をしている。こうしてムシルは、近代文明の桎梏とカモフラージュを取り去った別天地を1600メートルの高所に作り上げる。小市民としての平和で平凡で無難な生活を、無反省、無意識のうちに習慣的に過して来たホモにとって、この別天地の生活は実に魅惑的であり、再び妻子の許へ、以前の生活へ戻る気持をホモに起させない。息子の病気によって起った一時的な妻子との別居は、ここに完全な別居の形をとる。「ほんの僅かな刺戟と誘い、ひそやかな指示」によって「心象は拡大して幻視的な影像となり、」「刺戟と思考との間に、逸脱と変貌した世界への帰入との間に、ムシルの描く人間の運命が決定される」とW. イェンスは書いている。こうしてムシルは、社会通念的な愛の場を破壊して、ムシルの世界の愛を探って行くのである。

ムシルがこのような別天地を構成して行くにあたってとったもう一つの手法として挙げねばならないのは、精緻をきわめた多角的な描写である。ムシルは、ホモがグリージャと結びつくに至る外

的狀況とホモの心理過程を克明に書き続て行く。グリージャが登場する16ページまでは勿論その描出であるが、とりわけ、草原で寝そべて想いにふけるホモの心理描写と、時間の経過を追ひながらの動物、人間、カジノでの乱痴気騒ぎと鉱山の夜の情景描写は驚くほど、執拗なほどに克明である。「自伝のためのスケッチ」の中の、「私の内部にある、実にいろいろな次元に対する興味の並存」と言う言葉と、「実にいろいろな面で教養がない、と言う私の謙虚さ」と言う言葉に注意がひかれる。後の謙虚さについての自省は、リルケが嫌で嫌でたまらなかつた同じ幼年学校を気力的にも体力的にも耐え抜き、工科大学を出ると工学で、実験心理学を修めればその方面で大学の構師に招かれたムシルであるから、必ずしもこの自省の言葉は額面通りには受けとるわけにはゆかないが、こう言う自省と、「いろいろな次元に対する興味の並存」の素質は、ムシルをして凡ゆる可能な次元を追究させ、出来るだけ克明に描出するよう努力させたに違いない。Strelka はムシルのこのような作家態度を、一つのものを多角的に究めて行くムシルのエッセイイズムとして非常に強調している。

かくてムシルの世界は、空想と悟性の間を動揺しつつ、いわゆる現実と非現実が入りまじって、ムシルの意図する現実を現出しているのである。この空想と悟性の入りまじった最も著しい例としては、グリージャを連れ込んだ横坑でホモが幻覚状態で死んで行く個所の叙述をあげることが出来る。「出口はあった。しかしこの瞬間に彼は恐らくは (vielleicht) すでに衰弱しすぎていて、生の世界に戻れなかつたのであろう。」と書かれている。この「恐らくは」と言う言葉は、すでに幻覚状態のホモを描きながら、ここでムシルの悟性が働き、空想の間に悟性がひらめき出したものと解することが出来るのである。ムシルは、横坑の中で起っていることを正確には知らない、と言う意識と、正確には知らないことに決定的な叙述を与えたくない、と言う気持に突如支配されたのであろう。

## III

「意味深い把握と言うものは、冷静な理解とは違ったものである。それは悟性的な秩序であるのみならず、何よりも感情的な秩序でもある。意味付与は、とに角、内的な生命付与でもある。」とムシルは書いている。

ムシルは、自然によってホモの変容を決定的にする。自然はここに、ムシルによって深く意味づけられ、内的な生命を担って来る。白と紫、緑と茶色のまざった草原、浅緑色の苔でおおわれた古いから松の木がエメラルド色の斜面に作っているおとぎの森。苔の下には紫水晶や水晶が生きているのかも知れない。こう言う自然の秘密の中にいると、こう言うものが一緒になって一つの自然を作っていること自体が一つの秘密のように思われて来る。ホモはこう言う自然に包まれて宗教的な感情にひたるのである。自分を抱えていた自分自身の生の流れから自らを解放したことを今漸く知ることの出来たホモは、愛する妻を新しく感じる。「彼の心は愛する人に対し謙虚となり、乞食のように貧しくなっていた。誓いの言葉と涙が彼の魂から流れ出んばかりであった。」それにも拘らず、ホモは妻の所へ戻るつもりはない。高揚したホモの感情は森の周囲の花咲いている野原と奇妙にも結びつき、未来への憧憬がある一方、ここの花の中で死んでしまいそうな予感もする。そして、妻子と暮すことを何の疑いも抱かずに現実と思っていたことに気づくのである。「一人の人間が他のすべての人間とは違ったものであるとすることほど非現実的なことがあろうか。無数にある肉体の中で、自分の内的本質が自分自身の肉体に依存するのと同じぐらいに依存する肉体が一つ存在する、と言うことほど非現実的なことがあろうか。」と考へてみる。この時突然ホモは新しい確信を掴む。この瞬間にホモは心の中が明るくなる。「再結合 (Wiedervereinigung)」なる言葉に行き着いたのである。精神的な、より深い再結合と言う一種の悟りに達したホモは、結婚後の年月が加えていた妻の姿のゆがみが一挙に取り除かれ、永遠

の日が始まったように思う。ホモは今や、愛を「天上の秘蹟 ein himmlisches Sakrament)」と感じる。足下の金や宝石のひそんでいる大地は、ホモにとってはもはや地上的な宝物ではなく、「彼のために存在する魔法の世界 (eine für ihn bestimmte Zauberwelt)」である。ホモが自然から受け取るのは、物質財ではなく精神財である。ムシルは自然そのものを描くのではなく、ホモに反映された自然を描くことによって、自然を解釈し、自然を意味づける。だから、この金鉱採掘は失敗に終るが、それはホモにも、ムシルにももはや問題にはならない。ムシルにとって、この自然はホモに内省をうながし、精神的な高次の宝を探し出させる一つの局面である。

かくてホモは、「再結合」の悟りを得た日以後、「活動的でありたいという執念と死の恐怖から (von der Bindung an das Lebendigsein-wollen, dem Grauen vor dem Tode)」解放される。即ち、この日を以てホモの運命は決定されたと見ていいのである。何とならば、因襲の中で、何の疑いもなく習慣的に家庭生活を営んでいた平凡な人間が、ふとしたはずみでその家庭生活が解体し、その結果より高次の結合を把握するに至る、と言う「グリージャ」のテーマはすでにここで叙述し尽くされているように見えるからである。

しかし、ムシルは、更にグリージャを登場させて、なおもホモに試煉を与え、永遠に亘る、すなわち死後における、愛する人との結合を確定しようとする。従って、ここに登場すべき女は特定の人間である必要はない。干草を束ねている百姓娘たちを見てホモは、「あれはグリージャではなかったか。」と思ったことが示しているように、ムシルはある特定の女をホモにあてがったのではない。第一、グリージャなる名前は、Maddalena Maria Lenzi なる女が飼っている灰色の牛の名前をホモが勝手にこの女の呼び名として使ったに過ぎない。Kaiser と Wilkins の解説書「Robert Musil」によれば、ムシルは当時エジプト神話の研究、特に Isis と Osiris の研究をしていたと言う。この神話からの連想でつけられたグリージャなる呼び名は、牛の外観を持つ女神 Isis が下界

的な、人間らしからぬ様相を持っていると同時に月でもあることによって選ばれた呼び名である。即ち、グリージャは、ホモを死に至らしめ、ホモを永遠に亘る愛する人との結合の中へ確定する役割を演ずるだけである。グリージャの本名の Maddalena Maria Lenzi なる名前が、唯一回しか出て来ないこともこのことを裏書きしている。グリージャがホモの情人となるのは、グリージャが自然の一部と見られる「ほっそりとした毒茸 (ein schlankes giftiges Pilzchen)」的存在であったからである。ホモの身に起ったこの変化は「彼によって (durch)」ではなく、「彼と共に (mit)」起ったのであって、ホモの辿る方向を変えるものではない。グリージャと情事を重ねても、グリージャ以上に全身全霊を以って愛している妻のことをホモは忘れることが出来ない。「彼はこの愛が弱まるようには感じなかった。この愛は一層強まり、一層新しくなった。この愛は色あせなかった。しかしこの愛は、深く色づけば色づく程、現実において彼に何かをさせようとか、何かの邪魔をしようとかする力を失って行った。この愛は、生を捨てて死を待つことの出来る者のみが知っているある不思議さで、重味のないものとなり、あらゆる地上的なものから離れたものとなった。」もはやこの愛は、現実の妻ないしは愛人に対する愛を越えて、抽象的な高次の愛、永遠に続く精神的な結合となっている。そして、この悟りの体験を抱いたままでホモは、グリージャによって死の入口まで導かれて行き、金鉱採掘失敗と知って横坑を埋める命令を下すホフフィンゴットにより、いわば儀式的に埋葬されるのである。因みに、Hoffingott なる名前は、Kaiser/Wilkins によれば、Gottesliebe, Gotteshoffnung を意味する名前であると言う。ホフフィンゴットの役割は、因襲的習慣的な生活からホモを連れ出し、高次の愛を体得させる案内人と言えるであろう。

## IV

「始めから姦通の問題において、自己暴露と言

う他の問題を考えていたことは、個人的には決定的なことであった。」とムシルは書いている。姦通と言う異常な状況で、人間の本質が最もよく現われ、人間の真実の姿が洩れ出て来ると言うことなのか、とに角、姦通は「グリージャ」に限らず、「ポルトガルの女」にも、「トンカ」にも用いられているムシルの主要なモチーフである。ムシルは又こうも言う。「文学は生氣あるエートスである。普通、道徳的例外の描出である。しかし、時には例外道徳の綜合でもある。」と。ムシルは、あらゆる集団的な制約、あらゆる規範、既成道徳の仮面をはがし、より真実と思える現実を追い求めて行くのである。しかし、我々同様にムシルも、これこそが真の現実であると提示することの出来る現実を持つことは出来ない。そこでムシルは、普通の人間とは違った感覚を持った、可能性をはらんだ人間を登場させ、可能性をはらんだ世界を展開するのである。存在し得ると考えることの出来る一切を考え、存在しないものも存在するものと同じく扱える可能性を持った感覚が道徳革命を志す。昔から伝って来た宗教的、倫理的規範では十分に責任の持てなくなった20世紀の人間に向って、ムシルは新しい秩序を持った可能性の世界を提示しているのである。「ユートピヤとしての文学」とムシルは言う。このユートピヤは、可能性の人間の住む可能性の世界を意味している。

## V

ムシルは、現在の多層的多義的な生活を表現しようとしていると言っても、凡ゆる層を、又、凡ゆる解釈を克明に忠実に描きつくせるものではない。この場合には、どうしても模型による逆の方法をとらざるを得ないであろう。「科学は普遍性を求め、芸術はエグザンプルを求める。」とムシルが言っているのはこの意味に他ならない。しかも、このエグザンプルは、ある特定の人間、あるいはある特定の事件であっては意味をなさない。そのために、登場人物が特定の名前を持たず、身分や職業や性別だけで区別されているだけのことが多い。たとえば、「ポルトガルの女」では、ケ

ッテンの領主、ポルトガルの女、ポルトガルの女の友達としてあるだけである。「トンカ」では、トンカはなるほど女主人公の固有名であるが、それに対する主人公は「彼」である。「グリーンジャ」では、主要登場人物はホモ、ホッフィンゴット、グリーンジャと一応固有と見ることの出来る名前を持っているが、ホモ (Homo) は人類一般を表わす名前であるし、それぞれ意味を持った、役柄にふさわしい、工夫してつけられた名前であった。即ち、登場人物は個別的な人間として存在するのではなく、一典型として人生の模型を作るのに参画しているのである。ムシルのこの傾向は、おびただしい場面の転換、現実と非現実の交錯などと相俟って、表現主義的傾向を示している。ムシルがドイツ文学に表現主義を導入した、とも言われ、又、ムシルが表現主義作家の中に入れられているのもその為である。けれども、ムシルは、感情に重きを置く主観的ないわゆる表現主義作家とは違って、冷静な哲学的思惟を叙述の背後に常に感じさせる作家である。その経歴からも容易に推測し得ることだが、W. イエンスが強調しているように、ムシルは、靈感よりも計算の上に立って叙述する「学者詩人」としての面目を示している。

なお、「グリーンジャ」なる作品の位置づけについては、Kaiser/Wilkinsによれば、作品そのものよりもムシル全集の中で演じているその役割の方にむしろ意味があると言う。この「グリーン

ジャ」の意味のある位置づけの問題は他日に残すわけである。そして、構成の問題、自然の扱い方、真実の生の追究などの「グリーンジャ」において扱えたムシルの特性が、ムシルの集大成と言われる「特性のない男」にどう展開されているか、を今後の課題としたいのである。生そのものを全般的に、多層構造において扱えようとするムシルの作家態度は、当然ムシルをして「特性のない男」を未完のままに死ぬまで書き続けざるを得なくしたのであることだけは、容易に推察出来るわけだが。

#### 〔使用したテキスト〕

Robert Musil: Drei Fruauen, Rowohlt Verlag, 1962

#### 〔参照した文献〕

Joseph Strelka: Kafka Musil Broch und die Entwicklung des modernen Romans, Forum Verlag, 1959

Kaiser/Wilkins: Robert Musil, Kohlhammer Verlag, 1962

Wilhelm Emrich: Die Erzählkunst des 20. Jahrhunderts und ihr geschichtlicher Sinn (in: Deutsche Literatur in unserer Zeit, Vandenhoeck & Ruprecht Verlag, 1959)

原田義人: 反神話の季節, 白水社, 1961

W. イエンス 高本・中野訳: 現代文学——文学史に代えて——, 紀伊国屋書店, 1961

Van den Schrijver.

# DE TROONSBESTIJGING VAN DEN KEIZER VAN JAPAN.

DE RELATIËN IN OUDEN TIJD  
VAN HOLLAND TOT JAPAN.

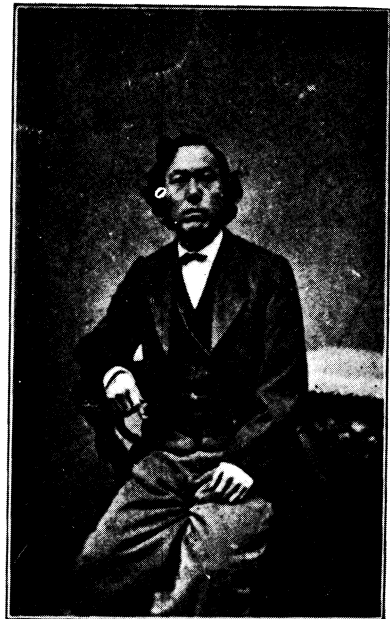
(Herinneringen uit het archief van mijn Vader)

DOOR

Mr. G. VISSERING.

OVERDruk uit „DE INDISCHE MERCUR”, No. 46, 14 NOV. 1920,  
WEEKBLAD VOOR HANDEL, LANDBOUW, NIJVERHEID EN MIJNWEZEN  
IN NEDERL. OOST- EN WEST-INDIË. COMMISSIE VAN REDACTIE:  
PROF. DR. P. VAN ROMBURGH, PROF. DR. E. A. F. C. TENT,  
DR. H. C. PRINSEN CLEERLIJS EN PROF. DR. L. P. DE BUSSY.  
FRJIS VOOR NEDERLAND EN NED. INDIË, / 18—, BUITENLAND, / 20—.  
UITGAVE DRUKKERIJ EN UITGEVERIJ J. H. DE BUSSY, AMSTERDAM

西 周 助  
*Nisi Sioe soeké.*





*Wisseling*

DE HOOGLEERAAR VISSERING  
naar eene schilderij van Adolf Pirsch.